

平成28年度

学校関係者評価報告

2019年3月

学校法人浦山学園
富山情報ビジネス専門学校

「学校関係者評価報告書」の公表について

本校では、教育や業務の改善を図るべく、継続的に自己点検・評価に取り組んでおります。このたび、更なる教育の質の向上を目指し、高校関係者・保護者・卒業生や地域にかかわりの深い企業の方々を中心にご意見等を賜り、今後の教育活動や学校運営に反映させるべく、「学校関係者評価委員会」を実施いたしました。

この委員会での検討内容を「平成 28 年度 富山情報ビジネス専門学校 学校関係者評価報告書」としてここに公表いたします。

委員会では、多くの貴重なご意見やご指導をいただき、あらためて感謝申し上げます。今後は、各評価委員からいただいた貴重なご意見、ご助言を真摯に受け止め、より質の高い教育、学校運営を実現すべく、教職員一同努力してまいります。そして、その結果につきましては、毎年学園のホームページ上で公表してまいります。

引き続き、温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月 31 日

学校法人 浦山学園
富山情報ビジネス専門学校
校長 永井 真介

学校関係者評価委員会報告

本校は 22 年度より、財団法人 短期大学基準協会が定めた「短期大学評価基準」に合わせて自己点検評価を実施している。今回の学校関係者評価は、この基準に加え、文部科学省が策定した「専修学校における学校評価ガイドライン」を踏まえた内容とした。また、本校と関係する企業や団体等から学校関係者評価委員を選出し、「平成 27 年度自己点検・評価報告書」の内容と「平成 27 年度自己点検・評価報告書課題」を中心に、教育活動全般について評価していただいた。加えて、学校の新しい取り組みや学校を取り巻く環境や課題についても、報告や相談をおこない、学外からの意見と助言を求めた。各委員からの意見は、校長以下、自己点検・評価に係る担当者が承り、その内容等について要約の上、報告書として取りまとめた。

学校関係者評価委員会 委員

氏 名	所 属	選出区分	任 期
吉岡 隆一郎	株式会社文苑堂書店 代表取締役 社長	地元企業関係者	2 年
杉本 章郎	富山情報ビジネス専門学校 同窓会 会長	卒業生関係者	2 年
奈呉江 教典	高岡龍谷高等学校 校 長	高等学校関係者	2 年
寺谷 隆子	富山情報ビジネス専門学校 後援会 会長	保護者関係者	2 年

(敬称略)

平成 28 年度 学校関係者評価委員会議事録

開催日時：平成 29 年 2 月 21 日 17:30～19:00

実施会場：富山情報ビジネス専門学校 C 館応接室

出席者：学校関係者評価委員会委員

委員長 吉岡 隆一郎 株式会社文苑堂書店 代表取締役社長

委員 奈呉江 教典 高岡龍谷高等学校 校長

委員 杉本 章郎 富山情報ビジネス専門学校同窓会 会長

委員 寺谷 隆子 富山情報ビジネス専門学校後援会 会長

富山情報ビジネス専門学校出席者

永井 真介 富山情報ビジネス専門学校 校長

山田 太 富山情報ビジネス専門学校 教務部部長

折田 真一 富山情報ビジネス専門学校 教務部学科長

清水 大樹 富山情報ビジネス専門学校 教務部学科長

松倉 基晴 富山情報ビジネス専門学校 教務部学科長

喜多 良雄 富山情報ビジネス専門学校 企画推進部企画推進課長

南 忠志 富山情報ビジネス専門学校 企画推進部学事課課長

政岡 孝子 富山情報ビジネス専門学校 企画推進部学事課主任

議事次第：

1. 開会
2. あいさつ・趣旨説明
3. 平成 27 年度自己点検・評価報告説明
4. 質疑・応答
5. 平成 28 年度活動紹介
ホテル・ブライダル学科 ラサール・セントベニール大学（フィリピン）留学
報告
6. 閉会

資料：

- ・名簿
- ・委員会規程
- ・自己点検・評価報告書
- ・ホテル・ブライダル学科 留学資料

議事内容：

1. 開会

委員全員出席を確認し、開会した。

2. あいさつ・趣旨説明

新学校種として専門職業大学の設置基準が発表される予定であり、当学園においても申請する予定であること、また次年度新入学生の状況が留学生の比率が高くなること、最近の就職をとりまく環境について、永井校長より状況を報告した。

3. 自己点検評価・評価報告説明

平成 27 年度自己点検・評価から、今後取り組むべき具体的課題として 20 項目を挙げ、概要を説明した。

昨年の委員会で指摘があった、学習成果を報告内容に項目として入れ込むことについて、今年度報告では学科ごとに主要検定を含めた実績報告をおこなった。

卒業生アンケートを実施しているが、活用が十分におこなわれていない。継続的に検討し、PDCA サイクルにのせていくことが必要である。

基礎学力が不足している学生が増えてきている。この対策として、次年度ラーニングセンターを設置する予定である。

留学生の増加に対応するために、受け入れ制度と卒業後の進路について、より広い範囲で検討をすすめ、留学生と社会の仲立ちをおこなう。

当校では、アドバイザー制度（担任制）を導入しており、学生の学習支援から生活にかかわるまでの相談・サポートを行っているが、メンタル面でのケアが必要な学生や就職意欲が低い学生が増えてきている。このためアドバイザーの負担が増大し、十分な学習指導につながらない問題が出てきている。この課題の対応策として学校全体で担っていくための体制整備 を検討する。

就業意欲が低い、基礎学力が低い、社会性を持たずに卒業するなど、多様化する課題について、どう対処していくかが課題となっている。これを含め、募集要項でのアドミッションポリシーの記載について、どう伝えていくか検討する必要がある。

学校の人的資源については、現状明確な基準を設定できないでいる。例えば、専任教員の職位についても実務経験年数以外の客観的評価基準がない。専門分野の資格等、教育と社会の間をつなぐ指標作りは今後の課題となっている。

FD 活動や研究活動についての規定が整備されていない。これを H29 年度に整備する計画としている。専門職大学もふくめて早急に対応する必要がある。

事務職員の能力開発については、計画的な取り組みを始めたばかりの状態である。これを進めるとともに、能力開発の成果を利用するための仕組みづくりも検討を進める必要がある。

必要とされる授業に対して、教室が不足している。学科コースの再編も含めたクラス数の見直しと、授業の効果的な集中化と分散化を図る。

校舎の老朽化による不具合が増えてきており大規模な修繕を必要としている。計画的に実施できるよう予算面を中心に検討していく。

課程のカリキュラム編成および実施の方針に基づいて、効果的な学習成果を得るため、技術的な資源を整備しているが、未だ充分とは言えない。カリキュラム実施計画に基づいたインフラ整備計画を再検討していく。

財的資源については、収入における学生生徒等納付金の割合が約 8 割を占めており、学生数によって財務状況が左右される状況となっている。学生数の増減が、教育活動に大きな影響を及ぼすことは、好ましくない。収容定員充足率に相応した学科専攻ごとの収支バランスを把握し、教育の質維持が常にはかれるよう継続検討していく。

職業教育の取り組みについては引き続き企業などと連携し実践的で質の高いカリキュラムを編成するなどより社会のニーズに対応できる人材育成を目指す。

<昨年度検定資格進学就職率報告>

進学率は 100%であった。医療事務学科で診療情報管理士を目指す学生は診療情報管理士専攻学科へ進学した。日本語学科においては、平成 26・27 年度に大学と首都圏専門学校へ進学していたが、平成 28 年度からは、当校インターナショナルビジネス学科への進学者が出てきている。また、日本語学科で大学へ進学する学生が減っている。非漢字圏と漢字圏の学生は日本語漢字習得率が違っており、以前の漢字圏の学生ほどの日本語習得率が望めない状況にある。平成 23・24 年度はほとんどが大学へ進学していたが、この頃は中国からの留学生が多かった。しかしながら、中国でのデモ以降、一気に同国からの留学生が減った。金融危機も重なり、3.11 がとどめとなった（放射能）。平成 25 年よりベトナムからの留学生が増えており、人数は伸びている。1 年課程への入学生は 1 年間専門学校で学び、卒業後は福祉短大で看護を学ぶこととなっている。今年度は 9 名が短大へ進学する。彼らは、もともと介護の学校で勉強をしていた学生である。また、特別養護老人ホームのなごみの里にアルバイトを志願して行っている学生も居る。介護人材のアルバイトをしている学生がとても喜ばれている。

4. 質疑・応答

<留学生について>

吉岡>留学生は、マニュアル人間ではなく気が利く学生が多い。徴兵を避けることは目的の学生も来るが、優秀な学生もいる。

折田>学生の留学先は、学生が豊かになればアメリカとかヨーロッパへとシフトしていく

<学力レベル差・障害等について>

吉岡>高校でもレベルの差がある人に教えるのは大変ではないか。

奈呉江>個別して対応している。

吉岡>実際に聞いてみると、対応すべき課題が多く、こんなにできるのか心配にな

る。

奈呉江> 現実に手のかかる子が確実に増えている。現場では、障害を持った子供と一緒に育っていく覚悟が必要になる。ここには悪いことばかりでなく、障害を持った学生とかかわることで学ぶことも多い。人権問題もあるので、慎重に対処する必要がある。

永井> アスペルガーの男子学生が在籍していたことがある。彼は、自分がアスペルガーであるので、学校で特別に対応してほしいと申し出てきた。出来ることと出来ないことについて検討し、対応したが、見られる傾向として、集団の中に入れない、こだわることに集中してしまう。チームで作業をさせたいが、本人が否定することが出てくると先に進まなくなる、などがある。学力的に能力が高い学生もあり、本人の興味がある学科に入学すれば、受け入れしやすいこともある。学生たちも共有すべきことが増え、受け入れに対し障害が少なくできると思われる。

学力が低い学生を含めた、多様性を受け入れることは学生の成長に通じる。留学生が入っているとか、人と違うことはダメだというような意識ではなく、全ての場で社会性を学ぶことが必要。次年度、高度情報システム学科では国際化プログラムの一環として、インターナショナルビジネス学科と交流していこうと考えている。日本人学生と留学生の双方がお互いの困っているテーマを助けあうという動きにつながることを目指している。

寺谷> アスペルガーなどの適用障害へ向き合い、就職もできないからやめるとかではなく、周りの学生の受け入れに積極的になってくれたことで、大きく成長された例もある。外国人の学生とミニ演劇を取り入れている例もある。留学生が活動する中に巻き込まれてやれるようになっている。成功例も悩む事例も両方ある。

<ラーニングセンター>

奈呉江> ラーニングセンターとは、具体的にどのような活動を想定しているのか。

山田> 構想段階ではあるが、放課後の時間を利用し、学生同士が指導する場を持ちたいと計画している。教える側の学生には有償のアルバイトとして担当してもらおうを考えている。できる学生が教えていくことで、理解も深まる。現状は、かなり学生間の学力差が激しい。また、入学前教育も実施したいと考えている。これについては、専任教職員がサポートし実施する。

奈呉江> 経済的格差が学力差につながっている状況がある。複合的に対応する必要がある。高校では、学びなおしを1年生から取り組んでいる。生徒の中で学び合うことなど、これから検証していく効果がどうなったか、気になるところである。

<専門職業大学>

寺谷>幼児教育学科は大学になると4年過程となるのか？4年勉強していると幼稚園教諭一種免許が取得できる。新卒だけでなく、学びなおしたい社会人の需要もあるのではと思われる。より実践的なカリキュラムを期待したい。現在、県内でも幼稚園教諭一種免許が取得できる大学はあるが、取得できる学校が増えることは、良いと思う。

6. 平成28年度活動紹介 ホテル・ブライダル学科留学報告

<報告 松倉>

昨年度の学校関係委員会で、実施予定であることを報告した、フィリピンの大学での業務参画型インターンシップを含む留学について、実施報告をおこなった。

カリキュラム・教材開発を平成27年度までに文部科学省委託事業としておこなっており、このインターナルインストラクションとして、大学が実習する場を持ち、そこで実習するもの。フィリピンのデ・ラ・サール大学での4か月にわたる研修プログラムを実施し、ホテルマンとして必要なコミュニケーション能力を身につけた。同大学は、フィリピンの首都マニラ市街に位置するフィリピン最高峰の私立名門大学である。

通常留学は、国内である程度の学習期間を持って、2年次または大学では3年次に行くことが多い。しかしながら、当校では1年次の後期（9月から12月）に実施する、ユニークな取り組みとなっている。初めの3か月は、語学やホテルの専門知識を学ぶ。授業はすべて英語で行われ、当校の学生も英語力について十分な能力とは言えない学生がいた。

出発までは、実績の無い長期間にわたる留学への対策として、学科内で、多くの解決すべき課題を多数想定し、問い合わせ等をおこなって、海外生活や治安に関する不安要素への対応や経済的負担に関する課題、国内での実習との連携、就職活動への具体的有効性など、細かく対応してきた。解決すべきことは多々あるが、学生の自主性や英語コミュニケーション力の向上が果たせるプログラムであると大きな期待を持って臨んだ。留学に必要な費用や留学先のフィリピンで受講するカリキュラム内容についても、時間をかけて説明した。また、外国語コミュニケーション力をつけるため、ホテル業務に特化した専門英語を学ぶ教材として、積上げ型の英語学習方法を取り入れて準備をおこなった。出発までの4月から8月までで、どれだけの英語力を身につけることができるかが、留学プログラムがより充実したものになるか否かを左右するので、一層力を入れて対応すべき事項である。

富山情報ビジネス専門学校では、文部科学省からの委託を受け、平成27年度「成長分野等における中核的専門人材養成等の戦略的推進」事業 富山県におけるインバウンド対応のできる中核的ホテルマン育成 の幹事校として、専門学

校、大学、短大生を対象とした留学プログラムを開発してきた。このプログラムをもとに、当校ホテル・ブライダル学科1年生12名と、提携校2校（山口県、愛媛県）から3名の計15名が第1期生として、4ヶ月間フィリピンへ海外留学を実施した。留学先は、日本（鹿児島）を含む全世界に各種教育機関のネットワークを有する『ラサール会』が運営するラサール・セントベニール大学（De La Salle- College of Saint Benilde）であり、同会がフィリピンにおいて数多くの各種教育機関を運営している中の一つである。地元でもユニークな学科構成と卓越した教育内容で知られている。この大学は、現代社会のニーズに合致したユニークな教育プログラムを意欲的に開発しており、とりわけ、ホテル経営学科（School of Hotel, Restaurant and Institutional Management）は、観光産業の盛んなフィリピン国内に多数ある観光系大学学部の中で、唯一Vatel Group の認可を受けている。フィリピンNo.1 と評価されている教育機関である。

※Vatel は、各国の最も優秀なホテル・レストラン人材養成機関のみにより構成される世界的ネットワークで、本部はフランス。

同大学のホテル経営学科では、大学校舎ビル内に併設され大学が経営する、Hotel Benilde での専門的な学びと、欧米各国でのインターンシップ（実務研修）を経て、フィリピン国内の一流ホテル・レストランはもとより、欧米諸国の一流ホテルへ多数の卒業生を送り出している輝かしい就職実績を誇っている。この留学プログラムでは、ホテル ESP（English for Specific Purpose）による英語力向上と、フロント・料飲・IT システム・バーの各部門について実務経験豊富な教授陣による講義や演習、そして校舎ビル内の Hotel Benilde におけるインターンシップ（実務研修）を日本人学生用にパッケージ化した中身の濃いカリキュラムで約4か月間、みっちり学ぶ。また、現地学生との交流や滞在先の学生寮（学生用 Condominium）での生活を通して、異文化社会に浸る日々の体験のなかで、日本では経験する事のできない様々な生活体験を積み上げていく。実践的な英語力を身に付けることはもちろん、グローバルに活躍できる人材としての素養を多面的に身に付けることができる。

学生たちは、フィリピンでの留学を通して、外国人に対する抵抗は全くと言って良いほど無くなったと思われる。留学当初、不安で帰りたいた言っていた学生達が、一ヶ月後には現地に溶け込み、現地の方々とコミュニケーションをとっている姿を見て感動した。近い将来、学生たちが日本に訪れるお客様をもてなす役割を担うために、この経験が活かされることを願っている。今回は、他校からの参加が3名だったが、次年度以降はより多くの方に参加してもらえよう、働きかけていきたい。

<質問等>

奈呉江>カリキュラムは共同で行ったのですか

永井>ホテル英語など、汎用的なものはあったが、ラサール大に行くためのものとして作りこんできた。外国人にも学びやすいものになるように作ってもらった

吉岡>4か月で生活滞在費 20 万円ほど必要になるようだが、現地の授業料はこちらで支払うのか。

⇒実際は、個人負担額は 20 万円で収まっている。カナダやオーストラリアに留学する場合比べ、格段に安い。

吉岡>来年就職するのか。

⇒それに向けて、現在、外資系のホテル等へインターンシップに行っている。

6. 閉会

自己点検評価について改善点が多すぎることにについて課題を絞って改善点を減らす努力を行うように伝え閉会した。

以上